

◎自由発表（第4会場）【座長・司会】若田 透（関西地区研究会常任幹事）

【演 題 等】「複合的な困難を抱える子を支える『チーム学校』」

～支援を要する子をつなぐ教育と福祉の新たな協働の再考～

【講演・発表者】大阪大学大学院 人間科学研究科 教育環境講座 教育文化学研究生
滋賀県教育委員会 SSW SV 社会福祉士 上村 文子

・発表概要

- 1 はじめに
- 2 先行研究の検討
- 3 インタビュー調査の概要
- 4 主な知見 (1) (2)
- 5 おわりに



・発表要旨

今般においても不登校、いじめ、自殺等、困難課題対応の生徒指導への支援が充実しているとは言いがたく、中でも「無支援」の状況をいかに改善するかということに注目する。

支援のこぼれ落ちをなくすためには「社会的包摂」の視点が不可欠である。教育委員会や福祉部局等の行政機関のみならず、地域住民・NPO・企業など多様な関係者がコラボレーションによるオーダーメイドな支援においてスキマを埋める取組が必要である。

事例として、ある子どものケース会議の参加者全員が誰一人親と会ったことがなかったため、関係構築のないまま支援の提案を行っても、同意を得られにくいことがあった。重要なのは「人のつながり」であり、「繋がり上手こそ仕事上手」である。具体的には経済的な制約で学習支援が受けづらいひとり親世帯などの支援のために、フリースクールへの送迎が困難な場合社会福祉協議会と送迎システムの構築や、クラウドファンディングによる子ども基金設立など、多様な地域資源を活用しながら不登校支援にも取り組んでいる。

家族全体をアセスメントし、「子どもや家庭を支えたい」気持ちの方向性は同じである学校、行政、地域の立ち位置の違いを誰かが翻訳したり、ブリッジをかけることにより「解きほぐす」動きを意識する。

望ましい支援の仕組みは、適切なアセスメントによる家族理解と学校内外の支え合いである。困難を抱える家族を孤立させないエンパワメントが円環的に学校教育による支援を好循環に導き、結果、教員の働き方改革にもつながる。

・質疑応答の概要

Q 学校と関係機関が立場の違いによりぶつかり合う場合があるが、どのように進めるべきか。

A 学校であればSSW、地域のことはコミュニティソーシャルワーカー（CSW）など、調整役を活用することに加え、本番で突然意見を述べず、インフォーマルでの打ち合わせや事後のフォローが円滑に進めるポイントである。

・記録者雑感

学校現場で勤務していた際に直面した課題に対する解決策を、事例を交えながら分かりやすくご教示いただいた。それぞれの立場の違いはあるものの、お互いを理解しつつ、インフォーマルな場面をうまく活用しながら進めることが、支援する側も含めたすべての人のウェルビーイングに繋がると理解した。